

関東梅苑会だより

—— 小中学時代のことを
教えてください。

小学校、中学校と飯野町のどかな環境でのびのびと育ちました。母親が同じ小学校の教師をしていたので、低学年まではとてもおとなしい子どもでした。ただ、その反動なのでしょうが、高学年になると児童会長を務めるなど活発で積極的な性格になりました。中学に入ってから父の影響もあって卓球部に所属。試合では本番に強いタイプと言

われていました。

授業「カット」が楽しみ

—— 福高での学生生活の思い出は。

いちばんの思い出は勉強しなくなったことですね（笑）。いまもそうかもしれませんが、進学校なのに勉強をする、しないは本当に自由で生徒の自主性に任されていた。だから勉強をする生徒は一生懸命するし、



カルビー株式会社
代表取締役社長兼CEO
伊藤 秀二さん
(高校27回)

しない生徒は本当に何もしてませんでした。私自身、高3の夏休みになっても進路が定まらないような中途半端な生徒でした。いまでも福高の伝統として残っていると思いますが、授業の「カット」が楽しみでした。その日の時間割で休講がある、と、クラス委員が午後の授業を受け持つ先生に直談判して、空いた授業時間に前倒ししてもらいます。午後の早いうちに学校から解放され、本屋や映画館に行ったり、友人の家でレコードの音楽を聴きました。そんな自由な校風だったものですから、田舎から出てきた自分にとって、見るもの、聴くものすべてが刺激的なバンカラで自由な空

バンカラで自由な校風に刺激される日々 「勉強しなくなったこと」が一番の思い出

気に包まれていました。

梅苑祭も良き思い出です。仮装行列では、素肌に舞台の化粧道具である白いドーランを塗って、当時、国交正常化で中国から来日したパンダに仮装し、福女の前や市内を練り歩きました。それと、いまなお趣味にしている「プログレッシブ・ロックス」「ピンク・フロイド」をテーマにしたブースをつくりました。当時はフォーク全盛の時代でしたので、映像や照明にも凝った展示は珍しいものでした。

マーケティングに興味

—— 上京後の大学生活について。

大学では経営学部に進みました。モノをつくり、販売して、ヒットする商品にいかにつなげるかを体系として学ぶマーケティングに興味があったからです。ただ、当時大学はまだ学園紛争のさなかであって、ロックアウトが続いていました。校内に入れないわけですから、授業はおろか試験も受けることができません。大学4年間のうち試験は一度だけで、あとはすべて

—— 就職先にカルビーを選んだきっかけは。

就職活動は東京に本社がある企業を中心に、自分の興味や関心にかかせて業種を限定せずに回りました。他人から見れば脈絡がないように見えましたが、やはり食品業界が多かったような気がします。

カルビーへの入社を決めたきっかけは、会社の商品が好きだったからです。それとマーケティングや広告がユニークだったからでしょう。楽しくて、面白い会社という雰囲気がありました。とくに会社説明資料に

ものづくりを 現場で経験

—— 新入社員のとときの思い出を
教えてください。

入社して最初に現場研修で4カ月ほど配属させられたのが名古屋工場でした。ここでは「チーズビット」という商品を製造していたのですが、当時の作業はまったくの人力でした。体力に自信のあった私は、そこで大きな釜をかき混ぜる最終工程を任せられました。道具は重し、熱い油ははねるし、職場環境はそれこそ厳しいものでした。でも商品が店頭に並んでいるのを見ると、「これがオレのつくった商品だ」と少し誇らしい気持ちになりました。

いまでも新入社員の現場研修制度は残っていますが、こうしたカリキュラムは「ものづくり」の重要性を学ぶ貴重な機会



高校3年生のころの伊藤さん

だと思っています。なにより私自身、工場管理の部門に興味を持つきっかけとなりました。当時、ベテランの現場の先輩から仕込まれた経験と知識がいまでも大きな強みとなっています。

—— 入社後のキャリアは。

トータルとしては営業が長いですが、生産、管理、経営企画、広報とあらゆる仕事をさせてもらいました。とくに新規ビジネスや新規部門の立ち上げといったプロジェクトの仕事にかかわりました。また、外部の方々の新しいネットワークづくりや、これまでにない新しい視点からの仕事は苦勞もありましたが、手探りしながら、貴重な経験を積むことができました。

—— カルビーという企業の
目指すものとは。

私自身、面白くて自由なことができる企業をイメージして入社したわけですが、現実に想像していた通りの会社だったと思います。当社は工場で商品を生

上場当日に 東日本大震災

—— 東日本大震災と郷土ふくしまへの思い出について。

震災当日の2011年3月11日は、当社にとっても忘れられ



長髪に下駄履きが当時の福高生の典型的なスタイルのひとつ(前列左から2人目が伊藤さん)

ない日となりました。ちょうど東証一部への上場当日だったからです。午前中、社長として取引初日となる打鐘のセレモニーを終え、午後3時からは記者会見を予定していました。その会見十数分前に震災が起きたというわけです。

当社でも生産設備が稼働停止し、オフィスへの被害がありました。が、震災直後から被災地域への物資や義援金、ボランティアの派遣といったさまざまな支援活動を展開しました。また、いくつかの民間企業と設立した「みちのく未来基金」を通じて、奨学金給付による震災遺児への進学支援にも取り組んでいます。物資による復興支援も大切ですが、教育を通じたこうした息の長い持続的な心の交流と支援が

—— 最後に福高生とOBの
皆さんにメッセージを。

卒業して大学に入り、社会人になっても福高出身という自信と誇りを忘れずにいていただきたい。自分の基礎が形成されるのは高校時代だと思います。みんな中学までバンカラでも何でもない人が、いざ入学すると自由な校風に育てられて誰もが福高生になる。これが伝統の力なのかも知れませんか。

いとう・しゅうじ
1957年生まれ。
1972年飯野中卒、
1975年福島高校卒、
1979年法政大学経営学部卒業後、カルビー株式会社入社、2009年代表取締役社長兼COO、2018年より現職。62歳。